

## 縄文時代の土器・石器

縄文時代の遺構はみつかっていませんが、縄文土器や石鏃（矢じり）などが出土しました。縄文土器は縄文時代後期～晩期（3,000～5,000年前）のもので、ヤカンのような形をした土器（注口土器）の注ぎ口の部分もみつかりました。石鏃には、サヌカイトと呼ばれる大阪府と奈良県との県境の山などで採れる石が使われています。



石鏃が完全な形で見つかりました。縁はギザギザになっています。



注口土器の注ぎ口の部分が出土した様子です。中にはまだ土がつまっています。

## まとめ

今回の大久保遺跡の調査では、平安時代末から鎌倉時代（約700～1,000年前）のものと思われる掘立柱建物跡や、溝、土坑などがみつかりました。中でも、大久保遺跡で最大級となる掘立柱建物がみつかったことは注目されます。大久保遺跡ではこれまでに2回の発掘調査が行われており（昭和57年度と平成26年度）、鎌倉時代から室町時代にかけての建物跡や土器・陶器などがみつかりましたが、今回の調査によって、平安時代末ごろから集落ができ始め、鎌倉時代にかけて発展していくことが分かりました。

潤田地区には、中世に「潤田御厨」と呼ばれる伊勢神宮の神領が置かれていたことが、古い文献からわかっています。平安時代末から鎌倉時代にかけて次第に発展していく大久保遺跡の集落は、こうした伊勢神宮神領の設置とも関わっている可能性があります。

このように、大久保遺跡の発掘調査の成果によって、数少ない文献などから断片的にしか知ることができなかったこの地域の古い時代の様子が、少しずつ明らかになってきたと言えるでしょう。大久保遺跡の発掘調査は今年度で一段落しますが、今後は、発掘調査で得られた情報や出土した遺物などを整理・研究し、大久保遺跡の内容をさらに詳しく明らかにしていく予定です。

## 【用語解説】

土師器（はじき）：窯を使わずに焼いた、赤茶色の軟質の土器です。

掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）：礎石を使わず、地面に穴を掘って柱を立てて建てた建物です。

御厨（みくりや）：中世に朝廷や伊勢神宮の領地として、農作物や特産品などを納める役割を果たしていた土地です。

矢柄研磨器（やがらけんまき）：平べったい石に真っすぐな溝をつけた石器で、矢を真っすぐにするために使われたと考えられていることから、この名があります。

山茶碗（やまぢゃわん）：登り窯で焼かれた硬質の陶器で、中世に美濃、尾張、三河などで焼かれていました。

調査遺跡名：大久保遺跡（第3次調査）

所在地：三重県三重郡菰野町潤田

調査面積：1,744 m<sup>2</sup>

調査期間：平成27年8月7日～12月7日（予定）

原因事業名：平成27年度一般国道477号（四日市湯の山道路）道路改良事業

調査実施機関：三重県埋蔵文化財センター

# 大久保遺跡（第3次調査）現地説明会資料

平成27年11月7日



大久保遺跡は、三滝川の扇状地（標高約76m）にある菰野町潤田集落の西方に所在する遺跡です。この潤田地区内には、かつて「潤田御厨」と呼ばれる中世伊勢神宮の神領が置かれており、また、江戸時代においては幕府の巡見使が通った「巡見道」が通っているなど、交通の要所でもありました。

菰野町内の遺跡としては、大久保遺跡の1kmほど東に所在する椋ノ木遺跡では、飛鳥時代の集落が見つかっています。さらに扇状地を海側に下ると飛塚古墳があります。朝明川左岸の下江平遺跡では、奈良時代から鎌倉時代にかけての集落が見つかっています。出土遺物としては、大久保遺跡の北2kmの杉谷中世墓群では、13～14世紀の古瀬戸の四耳壺や水注、中国製の鉄釉壺などが出土しています。西1～2kmの西江野A・B遺跡では、縄文時代早期の矢柄研磨器が出土しています。

しかしながら、菰野町に流れる朝明川・竹谷川・三滝川沿いにこうした集落跡や古墳が見つかるものの、この扇状地内ではあまり遺跡が確認されておらず、このあたりの昔の人々の様子は不明なままでした。

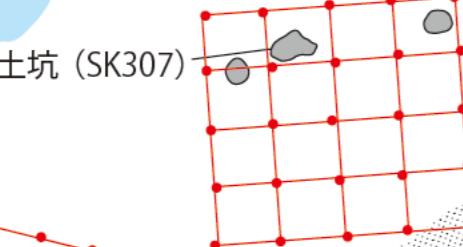




黒い土で埋まった溝 (SD303) の痕跡がよく分かります。

落ち込み

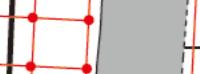
掘立柱建物 (SB311)



土坑 (SK313)



土坑 (SK315)



土坑 (SK316)

掘立柱建物 (SB314)

0 10m

## 調査区の全体図

掘立柱建物 (SB301)

掘立柱建物 (SB302)

溝 (SD303)

砥石が出土したピット

掘立柱建物 (SB310)

土坑 (SK307)

管理設溝 (現代)

土坑 (SK313)

ピットから砥石が出土した  
様子です。

## 見つかった遺構や遺物

### 掘立柱建物

平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡が5棟見つかりました。建物自体はすぐなくなっていますが、柱を立てた穴が残っていました。掘立柱建物には、建物内部にも柱を立てる総柱建物と、壁部分のみに柱を立てる側柱建物があります。総柱建物のSB310やSB314は、これまでに大久保遺跡で見つかった掘立柱建物の中でも最大級の規模です。

掘立柱建物の内部からは、いくつかの土坑(穴)が見つかりました。これらの土坑は、掘立柱建物と関係する施設であると考えられます。SB310の中にあるSK307からは、平安時代末ごろの土師器の甕や小皿、山茶碗などが出土しました(表紙写真)。

掘立柱建物SB314の南東部に掘られた四角い土坑のSK315とSK316は、床面が平らで非常に硬く、土間のようになっていたと考えられます。台所や作業場として使われていた施設ではないかと推測されます。この2つの土坑からは、鎌倉時代の山茶碗や陶器の壺などが出土しました。



柱を立てるために掘った穴の痕跡が、黒く残っていました。

### 溝

調査区を南東から北西に向かって横断する溝がみつかりました。北へ行くほど深くなっていますが、北東部の落ち込みに向かって水が流れているようになっています。また、排水と同時に、土地を区画するような役割も果たしていたと考えられます。

この溝からは鎌倉時代の山茶碗が出土していますが、そのうち2点には、底の裏側に墨で記号か文字のようなものが書かれています。



山茶碗の底の裏側の墨書きです。  
左側は「小」、右側は「の」の字  
のように見えますが、文字なのか  
記号なのかははっきりしません。

### 土坑(穴)

掘立柱建物の周辺でも土坑が見つかっています。SK313からは、平安時代末ごろの山茶碗や、完全に形が残っている土師器の小皿が出土しています。



完全な形で出土した、  
土師器の小皿です。

### ピット(小穴)

ピットの中から、砥石が出土しました。砥石にはキメの細かい石が使われており、表面には刃物などを研いだ際につけた傷が見られます。

※規則的に並ぶ多数の細い溝は、近代の耕作によって掘られたものと考えられます。